

挑戦すること

①運動部に入る。これは、ぼくにとって「挑戦」に値することでした。小学校のときのぼくは、運動することが大嫌いで、いつも家の中にいました。どんなスポーツをしても、ほかの人より劣っていて、その事実から目を背ける自分が大嫌いでした。それと同様に、自分の力ではどうしようもないことになつたかと、いつも「あきらめる」という結果に達する自分が、嫌で仕方ありませんでした。

②そんなぼくもいつしか、こんな弱い自分をこのままズルズルと引きずっていいいいのか、挑戦しなければ何も変わらないのではないかと、自分に問いかけるようになっていきました。そこで、中学校に入学するときぼくは思いきって運動部であるバドミントン部を選び、入部届けを提出しました。これは、僕にとって大きなかけでした。

③しかし、そこでも自分はほかの人より劣っているということを改めて感じさせられました。同じ部の友達が次々と筋トレを終わらせていく中で、僕はたった数十回の腕立て伏せが、一時間以上かけてもできませんでした。それでもぼくは、とにかくそのときできる分だけを毎日続けました。すると一か月ほどたったころ、初めはあんなにできなかった腕立て伏せが、軽々とは言えませんができるようなになったのです。このとき僕は初めてできないことに挑戦し、それを努力で結果に結びつけるということの喜びを知りました。それまでのぼくは、できないことはあきらめて、生まれつき得意としていくことだけを選んで生きてきました。しかし、努力することで不可能を可能にすることができるということを知り、何か妙に自信もてるようになったのです。

④その後、先輩たちが引退し、僕が部長となりました。ぼくたちは思う存分活動ができることに充実感を覚え、一生懸命取り組みました。しかし二年生の後半ごろから、部活をさぼる人が出てきました。特に、学校の外回りを走る「外周」と呼ばれるトレーニングのときは、さぼって帰る人の方が多い日もあったくらいでした。部活動黒板に「外周十周」と書いておいても消されていたり、時には自分一人だけ走っているという日もありました。それとともに、だんだんとまじめに走っている自分がばからしく感じられてきて、いつその

こと自分もさぼってしまおうかと考えるようになりました。しかし、そんなときは「ここでさぼったら昔の自分に逆戻りだ。部長としての責任もある。そしてなによりこれは自分への新しい挑戦なんだ。」と強く自分に言い聞かせ、ただ黙々と走り続けました。

⑤ つかい毎日でした。どうしても、さぼっている人を見ると頭にくるし、一人でがんばっているということも孤独でさびしいことでした。それにもともと走ることが嫌いなぼくには、その外周を走るという行為自体が苦しいものでした。

⑥ しかしそのうち「努力する」ということは、苦しいけれどやり遂げれば必ず自分のプラスになるということがわかってきたのです。

⑦ そのことを実感したのは、中総体区大会のときでした。ダブルスで出場した僕の組は、三位をかけた試合で、あと一点取られたら負けるいうところまで追いつめられました。きつと今までのぼくだったら「負ける」という恐怖感に押しつぶされて、すんなり勝ちを相手に譲ってしまっていたでしょう。しかし、そのときのぼくは、「こんなところで負けてたまるか」という勝利への執念で、自分に打ち勝つことができたのです。結果は勝利。あ那时的の挑戦が自分を精神的にも成長させてくれたのだと思います。

⑧ このことから、挑戦するということは、自分を強くするためのチャンスなのだと思います。そして、「あきらめる」という言葉が、なんだか遠いもののように感じられてきたのです。

⑨ 県大会では満足のいく結果を残すことはできませんでしたが、この二年半はぼくにとって「挑戦すること」のすばらしさを学ばせてくれた、とても意味のあるものでした。

⑩ 部活動を引退したあと、走ることが嫌いだっただぼくは駅伝に挑戦しました。そのほか合唱なども頑張りました。そして今後もぼくはいろいろなことに挑戦し、自分を磨いて、決してあきらめることのない強い人間になっていきたいと思っています。

⑪ 皆さんも、今できないことをあきらめず、自分を変える挑戦をしてみませんか。

⑫ 明日もぼくは、また新しい何かに挑戦し続けます。そう、あの弱かった自分を、もう一まわり強くするために。